

東洋の視点から試みる《世界文学史》構築の可能性

キム・レーホ

(ロシア科学アカデミー世界文学研究所)

多層的な《世界文学全集》を出している国は少なくない。しかし、多重構想の、つまり人類の全時代、全地域にわたって通観した総合的研究としての《世界文学史》を試みた国はまれである。東洋ではまだ《世界文学通史》は生まれていない。

西欧では、ヨーロッパの視点からみる世界文学史が幾種類か書かれている。編集の一般的傾向として西洋中心主義が指摘されている。世界文学史を東西各民族文化の综合体として見るのではなく、ある特定の地域の「大文学」と恒久的価値を有する作品が評価の主な対象となり、それ以外の文学は、世界の中心から遠く離れた周辺領域の文学として取り扱われる。

そのような世界文学史概念を否定して生まれたのが、ロシア科学アカデミー世界文学研究所刊行の《全世界文学史》であると言える。全8巻から成るこの叢書は1983年から1994年に亘って出版されており、準備段階をふくめて、ほぼ20年をかけた作業、まさに長いタイムスパンに耐えた研究活動であった。方法論として世界文学の統一性が強調され、いわゆる「小文学」に対して真剣な注意をはらっている。世界文学史とは、《古代から今日に至って創作された「すべて」の文学の總体である。その際、總体というのは単純で機械的な總計ではなく、世界文学を構成する部分の相関性と力関係、そしてその絶え間ない変化過程において認識することである》¹。

いくつかの問題をめぐって原則的な討論が行われた。例えば、方法論としての一元論的歴史観、世界文学史の時代区分等々。1917年のロシア革命を現代史の起点とみる意見には異議があった。20世紀前半の文学を取り扱った第9巻が未刊になったひとつの理由でもある。「東洋ルネッサンス」の問題は始めから激しい論争を呼び起こしたが議論は今日に至っても決着しない。

東洋におけるルネッサンスを強く主張したのは、日本、中国、朝鮮文化の研究で有名なN.コンラドであった。彼によれば、ルネッサンス世界文化発達の歴史的道理にかなって起きた当然の結果であり、それは東西共通の現象である。N.コンラドは、ルネッサンス史の年表をつくり、その始まりは8世紀の中国にさかのぼり、宋時代の文人、哲学者韓愈(768-824)の「人間哲学」はルネッサンスのヒューマニズム

と同質だと主張する：《韓愈は人間の中の人間性をまったく具体的に思惟する：それは人間の社会的本質の特徴であるのだ》²。コンラドの説によれば、中国に発生した文芸復興的思想は朝鮮・日本に渡り、東アジアの広汎な地域に広まった。

東洋ルネッサンス説は好意的に迎えられた。古代コーカサス、中世の中近東諸国におけるルネッサンスの問題が活発に論議された。この説を一貫して態度を変えない学者たちが数多く現れ、また、発表されたいくつかの論文のタイトルをあげてみる。

- S. ヌチビゼ (グルジア) 「ショタ・ルスタベリと東洋ルネッサンス」(1947)
- V. チャントゥリヤ (グルジア) 「11-12 世紀グルジア・ヒューマニズムの教育学」(1961)
- V. チャロヤン (アルメーニヤ) 「アルメーニヤ・ルネッサンス」(1963)
- V. ジルムンスキー (ロシア) 「アリシェル・ナボイと東洋文学におけるルネッサンスの問題」(1967)

東洋ルネッサンス説は、また強い反論をよび起こした。否定の声はロシアの中国文学研究者たちの中から始まった。ルネッサンスの普及と拡大には一定の境界線があり、その中心は西ヨーロッパであると言う。中世紀の東洋には、西洋ルネッサンスにみるような「個」と「自由」の概念が成立していないばかりでなく、ルネッサンス思想が広汎な地域における文芸思想運動として発達する基盤がととのっていない。東洋の中世史はあまり長くつづいたのだ。その土壌においてルネッサンス的情熱は発展することが出来ないと主張する。

この論争は明白な結論なしに終わったと言える。ルネッサンスを取り上げた第3巻には次のように書かれている。《この巻にはヨーロッパのルネッサンス文学が幅広く述べられている。〈……〉東洋文学におけるヒューマニズム的傾向と、それがたどった運命についてもまたくわしく論述された》³。結局、文学概念としての「東洋ルネッサンス」は認められなかった。しかし、懐疑派は依然として残っている。類似学的研究を基にした東西文学におけるルネッサンス的要素の相似性の研究は続けるべきである。この問題の究明には東洋学者たちの積極的な参加が期待されるのは当然だろう。

東洋ルネッサンスはすでに日本文芸学の関心を引いている。《日本ルネッサンス誕生——日本ルネッサンス史論》(1977)は、著者福本和夫の回想によれば、1936年に着想された。それ以来まさに40年の歳月を経てなしたとげた著書である。日本のルネッサンスは17世紀後半から19世紀の中葉に至る190年間の歴史であり、当

1 『全世界文学史』第1巻、モスクワ、ナウカ社、1983年、6頁。

2 N. コンラド『西洋と東洋』モスクワ、東洋図書出版社、1966年、128頁。

3 前掲、『全世界文学史』11頁。

時のマニファクチュアの発展と結びつけて考察する。《およそ、こういった仕事に、完成とか完結とか、いうことは有りえない。〈……〉それゆえ、私は後来の知己によって、此の事業が継承され、追補増修され、ひいては、東西のルネッサンス並びに人間性の問題が、新たなる見地と方法論から見直され、さらに展開されるよう、切望してやまない》⁴——示唆に富む作家の言葉である。

外国人によって書かれた日本ルネッサンス論がある。R. キルクブード。日本のルネッサンス。著者は17世紀と18世紀初頭の日本文学を日本ルネッサンス文学と名づけ、この時期の日本文学とヨーロッパ文学におけるルネッサンス的要素の類似性をくわしく調べている。この本は西欧で二版を重ねており、ロシア語訳が1988年に出ている。

しかし、日本においても東洋ルネッサンスの論議は賛否の両論に分かれている。森鷗外は小説《青年》(1911)の登場人物を通して、ルネッサンスは西洋に限るとはっきり言っている。戦後、1946-1947年にかけてルネッサンス否定論は再びもりあがった。《われらは、歴史的实践としてルネッサンスを経験しなかった》(《ルネッサンス》誌、1946年5月号)。

大江健三郎は1999年、ストックホルムにおけるノーベル賞受賞の際の演説において、作家としての自分の故郷はフランスのルネッサンス文学であり、M. バフチンが理論化したラブラーの《グロテスク・リアリズム》に学んだと言う⁵。しかし、日本ルネッサンスについては一言もふれない。彼はそれを認めていないからだろうか。果たして、日本はルネッサンスを経験しなかったのか？ 疑問は残っている。

東洋の視点から試みる《世界文学史》を考える場合、田岡嶺雲の評論は注目に値する。彼は早くも19世紀の末に世界文学史の新しい構築を夢見ている。《看よや西欧文物崇拜は既に過去に帰し、國粹保存の論も古りて、今や將に國粹發揮より東西文明發揮に入らむとする也。〈……〉。吾人は二文明を計量比較し、採るべきは採り、捨つべきを捨てて、新しき衣裳を製し出さざる可からず。而る後、世界的新文明は成らむ》⁶。1895年に発表した嶺雲の論文《東洋的新美学を造れる》からの引用である。嶺雲によれば、東西文化交通の道は単純な接合で終わるのではなく、ふたつの要素が有機的構成をおこし、そこから生ずる新しい質性の創造である。これこそ、東西文明の咀嚼に格別な能力を發揮した日本が果たすべき役割だと彼は信じている。

《吾国民、由来同代の大胃腑を有す。己に吾國固有の文学に支那印度思想を同化せり。而して今やまた西欧文学の趣味を同化せんとす。東西思想と西欧思想と二者を一洪爐の中に鑄冶融渾して、文学の一大生面を開くは豈に吾邦文学者の大任には

4 福本知夫『日本ルネッサンス誕生—日本ルネッサンス史論』、第1巻、東京、インタープレス、1977年、2頁。

5 M. バフチン『フランソワ・ラブラーの作品と中世・ルネッサンス期の民衆文化』モスクワ、1965年、30頁。

非ずや》⁷（田岡嶺雲『日本文学に於ける新光彩』1895）。

嶺雲は、東西文学（隣接諸国の地域文学を含めて）交流の意義は、究極のところ、異文化の単純な統合ではなく、世界文学の新しい《一大生面》を開くことだとくり返し強調する。故に、東西文学のシンテーズから生まれる新しい要素の深究が切実なる課題になるのである。

20世紀の30年代に、世界文学に対する日本の貢献について真剣に考えたもう一人は、野口米次郎であった。彼はアメリカに長く住み、その外国生活の体験を踏まえて問題の提起をしている。日本の作家が世界文学に寄与する為に必要な条件とは何か？

《私ども日本人が、文芸上に世界的価値を要求する場合には、日本人特有のものを提供しなければ駄目である。言い換えれば、中国とか西洋の影響以前の日本文学の産物、少くともその影響の薄いもので世界的価値を争わなければならない》（野口米次郎『世界における日本文学の地位』1932）。

野口米次郎は、神道に基づく日本の伝説、『古事記』『万葉集』等を世界的古典と認め、平安時代の文学は、佛教、中国文学の影響があるとして認めない。日本人本来の情緒を維持することこそ、日本文学が世界文学につながる基本的な要因であると固執する。勿論、民族の伝統意識を異文化の精神から分離しようとする試みには議論の余地がある。しかし、民族文化の核心を守ることが世界文学につながる道という主張は納得が行く。

1914年の英国における講演で野口米次郎は17世紀の俳人芭蕉を中心に日本の詩歌論を展開しているが、その影響と意義は大きい。当時ヨーロッパにおいては、日本の俳諧はその簡短にすぎる詩形の故に世界文学としての価値をもてないという考え方がひろまっていた。例えば、アストンの『日本文学史』（1908）。異なる伝統に育った聴衆を前にして《一人の日本詩人が、暗示と象徴を主張する東洋芸術の精神をひっさげて *Intellect Beauty* を根幹とする英詩に挑戦し、英詩と対決した、比較文学史上劃期的な出来事であった》⁸。

同時に野口は芭蕉とヨーロッパ印象派の詩人たち（特にマラルメ）の創作において作詩上の方法と詩論に共通性を意識する。東洋固有の詩精神をヨーロッパの詩認識に対立、分離しようとする試みはない。東西は両立して融合し、相互作用を起こすのである。芭蕉をよんだロシアの或る文芸学者は今までの《抒情詩》の定義は書き直すべきだと言う。何故なら、文学ジャンルとしての《抒情詩》—《リーリック》(Lyric)の定義は、主にアリストテレスの《詩学》とヘーゲルの詩論に基づいており、日本の俳句、東洋文学の核心をなす抒情詩の体験を世界文学と関連づける仕業が今まで不十分であったからである。西洋の《Lyric》と東洋の《抒情詩》の概念を重ね

6 『田岡嶺雲全集』第一巻、東京、法政大学出版局、1973年、399頁。

7 前掲、366-367頁。

8 『現代日本文学全集』第73巻、東京、筑摩書房、1956年、403頁。

て、その複雑多義な意味を包含する文学用語は不可能だろうか。

世界文学史にとって大江健三郎のノーベル文学賞受賞（1994年）は特記すべき出来事であったと思う。古典的な《美しい日本の私》を謳った川端康成のノーベル賞受賞（1968年）から26年過ぎている。西欧は、東洋の古典は尊んできたが、東洋の現代文学は多分に西洋の「まね」と見て、その価値は度外視されがちであった。100年余りの歴史をもつ現代日本文学を代表する大江健三郎のノーベル賞受賞は現代東洋文学に対する西欧の認識が大きく変わったことを意味する。

ノーベル賞受賞記念演説で、大江は、前にふれたように、作家としての自分の故郷はフランスのルネッサンス文学であり、自分の創作方法はラブレールのグロテスク・リアリズムに支えられていると言っている。その作家が全ヨーロッパ的評価を受けたことは日本文学に限らず、東洋諸国の現代作家にとって大きな刺激であったことは言うまでもない。川端康成がもっとも日本的であって、大江健三郎は日本的でなくヨーロッパ的であるとはもう言えない。100年余りの歴史をもつ現代日本文学は広い意味において—東洋文学も含めて質的变化をなしており、その研究は世界文学研究の重要な課題のひとつである。

東洋の視点から試みる世界文学史の構想と関連して、もう一つの意見を述べてみたい。それは西欧の古典的な作品の再考である。例えば、有名な『戦争と平和』。ごく最近まで、トルストイと東洋のつながりは偉大な作家がアジア諸国の文学と社会に及ぼした影響であり、一方通行であった。しかし、トルストイ自身は東洋の自然・人間哲学、殊に老子の思想から深い影響を受けたことを繰り返し言っている。

『戦争と平和』が世に現れると、一部のロシアの評論家たちは一斉にトルストイを批判した。この小説は東洋の停滞思想に支えられており、描かれたロシアは歪曲されていると非難を浴びた。当時著名だった評論家シェルグノブの意見を聞いてみよう。《トルストイは積極的な行為は真の力を意味しない、それとは逆に衰弱した知能こそ物を動かす原動力と言う。しかし、これは近代思想家たちが今まで私達に教えた教義とは全く違う。誰が正しいか？ オギュスト・コントか、トルストイか？ 西洋か東洋か？ 誰が世界史を導くのか？ 西洋人か東洋人か？》（論説《停滞の哲学》）⁹。

注目すべきは、トルストイは『戦争と平和』を書いていた時点ではまだ東洋哲学を読んでいない。彼が《老子》と初めて出会ったのは19世紀の80年代である。『道德経』をドイツ語訳でよみ、その人間哲学の深さに感嘆して、それをいつも身につけていたと伝えられている。彼は、『道德経』は原文で読むべきだと思い、中国語を習い始めたこともある。

老子を知らず、作家が老子的思想を『戦争と平和』に点在するさまは比較文学の貴重な研究対象である。この類似性は、トルストイの生来の本質に東洋的な感受性

9 N.シェルグノブ『評論集』第2巻、S-페테르부르크、1895年、392頁。

が生きていたことを示しているのではなかろうか。

クトゥゾフ將軍の「無為」は老子の無為論とつながっている。トルストイは「無為」を深い「認識の哲学」と見ており、《無為》はすることであり、東洋の消極性とは関係ない。東洋における『戦争と平和』の批評はすでに100年余りの歴史である。しかし、この大河小説に生きている「無為」はごく最近研究の対象となったばかりである¹⁰。西洋古典の分析と評価は今まで主に西洋の評論を基にしていたように思う。自主的な立場で再考する時が来たように思われる。

完璧な《世界文学史》はありえないかも知れない。既存の《世界文学史》が果たした役割を過小評価することは正しくない。その貴重な体験をふまえて東洋の視点から試みる新しい《世界文学史》の構築を夢見る時が到来したと考えてみる。

日本は東西文化の集約地として広く知られている。日本ほど西側の文学を翻訳し受容した国はまれである。比較文化の研究が進んでいる。《世界文学史》構築の大事業は、日本文化研究の中心であり、創立20年周年を迎えた国際日本文化研究センターの長いタイムスパンに耐える研究の対象ではなかろうか。この仕事は、当然、東洋の専門学者たちの国際的協力と学際的な研究を要する大規模の文化事業である。これは時の要求であり、21世紀の東アジアにふさわしい偉業ではなかろうか。

10 キム・レーホ「トルストイと老子（《無為》とクトゥゾフの形象）」『言文学の世界』モスクワ、文学遺産社、2000年、260-270頁。